



櫻姫全傳曙草紙卷之四

江戸

山東京傳補綴

第十三

盲女小萩 曲死雪中

初野分の方ハ蝦蟇丸小誘引、愛宕の山奥ふいそ道とて便宜ト死  
 所ふるところまりり、の宝刀ハ抜め竹とりと斬けけとれ小蝦蟇丸  
 身瓜ふりしと死をさる婦人くをりゆる志む手瓜をぬく我のみこと瓜  
 吹ゆへと云野分の方呵々と打笑ありくの女と侮くいつつとものりて計  
 とんや汝池の裏より鉄塔を出て我を水中か引入今又か山中小陣  
 我ハ害し物を大奪を計不疑は我こまろく来ハ汝と試人為あり  
 せよとて又振上げ剣の下小蝦蟇丸山刀と投出婦人志す功の  
 權其刀瓜のづけりと敵とる公る死と察し我いふと瓜の死に

眼力のどく我實ハ盗人あり然しつども婦人ヲ害され公は其故語る  
を權かりしつども傍の古社公指しけし野分の方よりつゝ太刀公  
鞘におさめ前後お公をくらり古社のうちよりぬ切蝦蟇丸ひくも  
我彼池の辺におかくも水上お帯公うめ往來の旅人これ公拾取んと  
それ時水中お引入るゝおめ殺し衣服金銀をうり公業とん今日  
しも已お婦人を引入ておめ殺しつゝ婦人の容貌養廉あるを遂て  
一命公たしつゝお伴來より我愛情の深さを察し今より公を傾く  
我意よまごりて妻とありて生涯を安んじ婦人の今の手段をみる  
尋常の女子おあつて頗武藝の妙所あり然しつども我術お敵とること  
ぬふべしと婦人の衣服の襟をるべしつゝ野分の方襟を探り  
おさすつゝのまら打ん手裏劍を三本おめひつけおめ蝦蟇丸

莞々と打笑され若我とばぬうひふと立野お一命を失ふべしつゝ  
野分の方彼の手練と感し且志のせらるる公つゝとく公を折つて  
蝦蟇丸の容貌をみるお年紀ハ二十七八歳とわやく眉目秀麗渾身素  
雪のどく身材ハ六尺おらうじて世お希るお美男子ありこれまら  
只彼との中しのお容貌のよれお目をとめおどりがおめく公いで  
つゝつゝつゝお養男子あるべえ來の婦人お公動死殊更彼  
が武藝の達しる公尋常の者ありつゝある者の零落しつゝ  
おふつゝおと察しつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
倒し餓死より一旦彼お公一命公保後日良計とる公は  
と心おさめおんお公実お公又おんお公  
つゝ落花公の流し水も又おありつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

打笑けしむ六蝦蟇丸大よまび我今妻あはとも亡盲目とちりくこのの  
とねバ日来うとて居つれとことまゝふふのひく養かたぬ彼と追出  
まてのちりくぐのひく欺べし婦人これかを得べしと云とへつひふ  
つと家お飯り妻小菼お語けら今旧も京の町お出物賣くつへるこ  
池お落る婦人おなごけのげしふよりわれ伊方のさごとくして迷ひ  
わうたあふるれよりのまりの痛しふられまゝぐ伴せぬ汝を  
つひくいさりまゝあせしむる小菼か元来慈悲の娘女あれば夫の  
ことか信し情沸くつふあぞ野分の方しれわとふ答てこれよりけ家お  
とぞまりけりささく小菼と兄弟の娘とを庖厨かささく炊水くむ  
業とさせ野分の方へ一間をへらしたる所おかこし養妻の盲目か幸  
小菼諸公文字おめとささく語のひぬ一時蝦蟇丸おん身へ何人の  
あはれ果ふやと尋ける小野分の方つりくつひ妻へ原福原の皇居  
お仕へし官女あるが平家滅亡の刻と親族尽く失くたのむ方もあく  
乳母の家小養とく憂年月かささく頃日乳母おまはり乳母子は  
何某情ある者おとく妻お追出俄お憂目かをせつりおん身も又  
お下お卑賤の人とへええど何等の人とてお蝦蟇丸もつりく  
つふ某へ伊賀の國山田郡の住人平田平四郎真繼法師の子なり今  
源氏の代とまり世間もつりまゝこればかり人ささめ山中おわ  
住かりつひとささべれとささるれまふおもめとて賊とありぬわたりて  
こればかりおん身も我もそのお平家の重恩をうけらるるおん身と  
あつてもよれえめしなごさやとわたりつひく漸くお愛情  
あつてく月日をわたりつりわくく梢の蟬の色もしつり風のささ

敬驚うととれば残る松さへ峯ふささし死をの時とかりぬいしつふ  
せれ谷うげのわが家小肌寒夜嵐がちのた耳小満りの樵歌  
の色眼小遮るりの竹煙松霧の色のもかりまの者の住得  
おへの福と野分の方の愛情お公ひくれびいた暮しの苦おさ  
年の盛とささく色香の失んと瓜うは一向姿を粧ことおのこを  
へし貴族の胤といひあう幼時賤家小育し育るればめり住居も  
あうへぬさうらせざりけりさうふ又嫉妬の悪癖起り小萩親子三人  
とつりまごりつづふ養おれぬやささく追出しゆとらづぐや丸を  
のふとがる丸ひひけり兄弟の娘のめやちもよけし今もささく  
養たて船泊りの妓女などお賣つふさばおれ價を得べし小萩不日お  
追出さべしとのひさ折とるん合せゆふ一時小萩が丸がささく

ささりよりささひけり妾頃日推量おおかの土腸といひあ  
連来まじ婦人のおん月のわじ妻お疑まはとらうとも妻のわく  
音とさしおま露さうりも恨むべおさたおささくささ  
おの語おのささどとのおが丸いささおのささおの土腸のされ  
うへを穿しお福原の皇居お仕へる宮女のささり我父の平家の重  
思ぬうけされ人ささの平家一門とゆき見捨がささくささひわく  
あう瓜お追出さんとおひさささうりささめお盲とささりてさの  
用おさささ瓜夫婦の情とささひこれまご養おれつる其思も顧ど  
ささう悪念をたさうさの何の道理とや夫婦の縁へられささり  
ささく此家を出ささささ小萩泣きおささくこのささおさ  
兩人妻を追出さんと計さささささこれを推量しつ此家へ前の

とらとん 夫の家ありおん身へ後の夫ありのりあざうまを追出さんとなわい  
道ふたがうとやさむらうり妻とらとみありおん身あざうま出さへ  
妻へみどり死もせどとりのバがま丸眼をいけのらうるる(色)口功者  
る。女め哉去まづとらと追やうおんやとらといでゆけとらと椽より  
下小撲地踏かじゆとて小菽くらとらとさめはさふ齒かみひ牙をさるじ  
いふのあつとも此家へ動まどとらとひつらとわいこぬさむらうて椽のうふ  
とひのやりぬ此折しも背後小嗽の色とがま丸これを顧ら野分の方  
一間の破き障子と少一ひたのけとらとさむらうとひ目か必とらとゆめぞ  
がまたうさつたて小菽をさへ悪れ盲め憂目とせむら去まづとらと  
牛小黒髪とわとて引倒し麴棒とらとらとらと打打多ねば忽皮肉  
破き鮮血漏るるて總身朱小深りの苦やとらとめけけへ松虫村  
鈴虫村兄弟の娘め丸と左右の手小とらとつたて我くと打と母とぬを  
ゆてよといひとらとたけがが丸耳やもせ入を兩人をつとて又  
振のびと姉の松虫起より母のうふとらとらとこれ妻とらとらと打あひ  
母とゆとてとらとひつと両手とらとらとゆとて妹の鈴虫ののとらと  
さふらうらやと妻とらとらと打とて兄弟たがひ小身がわい出して母とわいふ  
孝心のあるげと小菽へおとせ公もまゆれとひやとらとらとげひ息が  
つた山うへへせんとは兄弟の子とらと具とらと出ゆめ妻今の親族もとらと  
失く立とてべた所もまけとて今とらとらとらとて今とらとらとらと食とらと  
たとい餓死とも親子三人手からうのうと餓死ぬべし果報つとらとらと  
ゆ多ふ憂目とえとらと不便とらとらとらとらと子ともふひとらと取  
哭けつとらとらと涙とらとらとらとらとらと手からう出ゆんととらとらと







若くはのり又ハ紅色とありく紅蓮大紅蓮の衆生の如く黒髪  
氷柱さうりく鈴をかけた中うふんくさるるまゝ丸もこりり  
忽枯木のてくさるるめ兄弟の娘はくらしさるるが丸おひ  
母人とのかゆせてしつひのびとりて母とえやう  
歎けり小萩はる日もさるるえと毒目の人えさるるうふ手足凍  
を去てかみひぐせせやくの傷ふふ一夜ハ此家よあをせてよといひ  
のさるるくあぞわくすて邪見の丸も少一公たゆりうが野分乃方  
そのつら瓜悟り丸丸が背中をつたぬくはもんべ丸うらうらうた  
のまのしき丸丸うらうらうらふふもゆさるるやあうらふ此子どりや丸丸  
前なく打殺べーとく野棒をさるる連打お打けしは兩人の苦痛ふと  
どのなやと叫きたら見たり小萩へふどりが苦しき色をばて五臓六腑  
さけらさるるあひやあひさるるまらてよとさるるあまらぬさるる  
さるるく独りああさるる彼等丸打らふさるるといひくさるるめく足を  
あさるるの起り破笠とらるる杖つさるる二あーこの歩い母さるる  
母子あま我等もさるる不運去去へとさるる色ふむれとさるるりさるる  
が丸兄弟丸丸不打ち苦むゆけは兩人がよひめとさるるれが丸丁と打  
ゆさるるりさるるつたゆさるる恩愛の紐つるるさるる四子ふりさるる桓山の鳥  
あまさるるさるるひあく雪のうらふ合破と伏むせうりてさるるあけな多野分の  
方丸丸をさるるめさるる又も兩人と打さるる小萩はあさるる等が苦しき色をば  
たど胸さへさるる盲目の子ゆさるる間の雪道をさるるつさるるびつさるる  
已ふ日も丸果けさるる野分の方丸が手丸推さるる一間のうらふさるる入  
をさるるあさるるさるるは権時とさるるゆけが野分の方打笑彼を追出して

やうく胸へくれうとわき盲目の才やくから雪中へおちたがさるれがとて  
へ去得まど若らうれのうらめ凍死あじ人の目ふからぬのうらめ  
あまぐさうへひぬと耳ふてさうやれいふもさうとさひ  
と瓜むげと裏口より走らぬ跡をささひく追行り切痛し兄弟の  
娘より左右の柱ふひつけらまはし打さく簀子のうへ倒伏さう  
正氣もさうりけさ姉の松虫やうく頭とのび鈴虫とさのびさふへ  
妹も頭をむぎのひうへささるやうら痛むらんまも堪さうと云松虫と  
我もが苦痛のちのびもせめ唯痛し母人あり寒氣くげれ雪の夜  
たどりぬれあひつと今さうの途中や凍死やらむひつらんさの跡を  
とさうんとささるもかくうらんせんさへはささるもつととも且父うへ  
たのつれ根さ道理は只情さるかの土臆なりとさめつとさる  
わさ鈴虫もささるのびとせむり世界の表と兩人が外へせりめ  
さうとひさう折しも峯越の雪巻風さささう兩人を嘔と吹倒又も正  
氣を失ひたりさうさふさる丸ハ雪中の足のぬかぬおと小碎瓊乱玉蹴  
りして小萩のぬかぬささひけり果ささの古社の軒下またささふ  
死ふさうとささる只糸のやうなれ息のささひけりおをけり縊殺さ  
屍を肩ふひたぬけ人の通ぬ山奥ふささる海谷底小投ささる飯  
けり誠是例とささる悪業あり

第十四

二人比丘尼發心記

わさ次日ふさうさる九兄弟の娘ふささう詞をささげ母の志ぬ  
ゆゑ懲りめのふさ追出つればささるささるささるはさ我をささる  
此家ふささうささるささるささるささるささるささるささるささる  
此家ふささうささるささるささるささるささるささるささるささる





野の  
鈴虫  
兄弟の  
加  
女  
常  
小  
打  
擲  
責  
つ  
ふ

妹ハ五把の柴をわきよ代はく日この昔小たをじ一把おとも不足せむ  
あけく痛打べーかあうど急入うどさうくいけさく追中りりかき  
山家小おひらるといども母の情あうこれまうさる業を仕られぬ山路乃  
業内さうさうふらうさうさう高山鬱くさう繁峯道もかた  
木のりぬけけのがり白うらじ足ハ荆棘の乃不紅瓜ふり黒さう  
まれ髪ハ蜘蛛の絲おまうりう紫を刈おぞあうらあひも手足さうさ  
息もたゆ堪がじとれどさうめの数を刈さる憂目ふあべーとちへ  
ぬいさど刈けるふのハ辛く七把の柴を刈けさうも妹ハけふ十歳の  
幼女さうさう三把とあり日ハ己ふあうたれぬさうのふむさういひら  
妻が柴さうめの数ハ二把たうぬ此終家ハ飯さうハ痛打じさういへ  
日いとやられんとさうぬぬと瓜川ん便もはこいさせんくさういへ哭れバ  
松虫妹が背ハ撫つさうさう嘔と妻が刈ハ柴のうらぬ一把けりてさう  
の柴の数を合くぬハ一氣づひさうさういひられハ鈴虫のひくらさうさ  
のうらぬ柴の数不足くさうかんと打さうあひさるん松虫のまはさうい  
さうさう難義とのがれべーとや夕飯調を比さうさうかうさうさ  
ありの時うららぬさうはあ人の怒ハのふべーとさうあうらぬさうい  
教をえせるさういひつ鈴虫がさうこの髪をわさあハおのさうの塵打拂く  
さうせ兩人ともお柴を肩腰さうめむり重となさうのむり家ハさう  
ぬ野分の方兩人が柴をのさうめさう忽眼尾ハたあけ松虫とさうさ  
のひらぬ悪奴妹さうさうめの数を刈つさうハ女年かさうのうらさう二把  
まう不足せむ畢竟物ハ怠さうめさう後日の懲ハめさうさう憂目ハ  
えさうべーとくけれ本とさうさう打さうさう鈴虫は色さうさうのひらぬ柴の

けろろの原まが罪かり妻を打つてのころは成りてよとひて野分の  
 方の袖もぐれを松虫かしのけとまゝつらつらと妻をくつんと  
 ろふもいつて実とまゝふへりのひかこゝろれをさうく居よとまゝり  
 つ覚悟の体をとろふなな鈴虫の胸の苦しさひもぐもぐのべ野分の  
 方松虫をとろへて柴小屋へつぎ行つては赤裸とまゝ高手  
 小手ふるらへて捨置鈴虫おひひは汝も我意小背のひのこゝろ  
 あぢりしとてえくおけこのひてあゝともれは鈴虫ハオの毛いしとらへ  
 かましく只ちのび泣居さうかきと時うつて野分の方へ戸あ入り  
 くねありおつた小夜もやうくふけぬ色は巴峽の猿の一叫小強さ結も  
 哀を催を種とまり寒月皎々と光く壁のやうれをとり飯條群竹吹  
 ぬと朔風松虫が机を冷とやうやう氷のこゝろさうく今も絶へる  
 あぢりしとて折しも鈴虫ハ拔足一つ柴小屋へ来りて袂ふるせ一塊の  
 飯とさうへて松虫ふるらへめおのほろろ物をぬきとて打させおさうへ  
 とそな餓むひつらんオウらの痛はらふとや妻ゆゑふかく苦しめやす  
 その勿体なきよとのひとこりさうりかむと色をたたく哭けし松虫  
 めろりしとて若彼人睡を醒さばとまゝも又憂目るべしとて  
 ゆささく床よ妻小かまふとさうれとて萬を胸におさふめくくべふら  
 出されども母小別して我のこゝろ力ふとふかあささなむかほくさうめ  
 と推量し胸もさうれとひやうとろのひ涙おむせびたりやうくおられ  
 朝ふらり鈴虫野分の方ふあひのこゝろあささく口びりれはさうく  
 柴小屋ふらりこれより後日お十把づの柴をわらべしと心得  
 せつとてとてと松虫へおまねおせそむれはさうくといふ小生



兄弟の  
幼女の  
の屍を  
悲し  
歎  
む

ちぶくいましめなるとくゆじたり野分の方おのほし人小越子  
 憐櫻姫の行方いと片時も忘るを愁るがそれ小ひれく  
 人の子奴あむむその甚しぬいふぞや誠是とらひまれる悪婦  
 さら不兄弟の子ごの毎日山小ゆるく柴を刈人もうよめ山奥  
 まぐりけりけり一日松虫岩のまふ屍くけり休息偶あつり  
 顧小谷底のゆるさえる雪のうら小一の屍とことりめ頻小心動  
 若母人あめめうとさふなまのひ兄弟手奴さうあひく岩のま  
 瓜段ふろ辛くく谷小下りるくげと果くく母の屍あり此ころ  
 つく雪天小餓がらる山鳥屍のく小群まぬる悲やと走りより  
 かあさぬ地へごちあさより群集せんとく木の枝をさうく  
 追り死屍小あつり母人よのち山奥へ来り死しむひ  
 なるふ迷ひく凍死やとらふくく縊さるやとあかめくさ  
 いふまでも再のひえんがたのく邪見の呵責が堪忍くくせし  
 かひさののりさめや情まの沙婆ややあ母人よといひく屍をゆ  
 動くかろくぐふくたなく天をのめく歎さ地小倒悲  
 又ぬりへ息ぬくうさくく狂人のどくおひけ  
 光景哀といふもあつらうられら後七日といふ小兄弟く未花  
 瓜供水を手向念仏とるくさくひらり柳人の屍の腐爛く日く  
 変ること九相の詩小賦く無常の賦くつわく今更いふくもの  
 のく記く見女勧善の一端とくとも兄弟の子ども七日めふ  
 くれがりと見面影のくもく古の人ともおがえど髪蓬の如く  
 五体青く腫爛目の玉の鳥のろくくいされ膚腐やうく齒



のくしおきりーげなれ光景るる小涙もさきまらざど二七日（二）の肉も  
 とば空吹風の四方へ臭氣なかりかちへ腫小腫くところぐの肉も  
 され腹もやど五臟六腑のり小乱て目もあてられぬ光景るる兄弟  
 の娘の涙をぬふひひりり成等正覚とのこひりりてどころひ  
 ける三七日小ゆさくふれバ容もつらど肉も腐まぐれ白蛆とあり  
 青蠅のりまうそわらふら臭氣盛小人を穢古のわらうげいつち  
 ゆらんぬのりたさぬる兄弟はるく頓證菩提と回向しそそ  
 飯る四七日小ゆさくふればや臭氣もろくあり骨小残る肉  
 もかり白蛆もさかりとふらりり青蠅も今ははるれ髪へ風  
 小ちりりところぐの草の根もとりいづまの人のくさくさるる枯草  
 無常の賦（一）白味を食へ婀娜も徒小犬鳥の屎尿と乃と  
 のうち野篁のゆふ残る骨もつれら所はは男女のさひもあく雨小  
 ちり日小さして臭氣も更小は只一頂の笠はく破とさまりて枕あり  
 一重の襪襪（二）りぐふらるく化へ塵とありぬ兄弟の子の死の腐爛と  
 小もむつらどところぐそののすり小おかくさく公もさるし七日くぬ如比  
 変化をのりさゆとえく初公も泡沫無常の世を悟松虫いひりぬハ  
 いふ妹をちのわらふとやうく此世小まぐ居る鬼のやうかの上臍小  
 かひつられ活地獄の呵責をうけり母への跡をさへむ草葉のつ  
 とやん小ぬた親子ひりらるる公のあれたの鈴虫も母へのあつ所へ  
 さへゆくあつたといつてつらの苦さぬうつねもいづい侍人のひら  
 とや母へのあつ伴てよとらふぞ松虫さめぐとるれかこれ者よといひ

いどちうとつぐかきふむく念仏アセまく西の方へかひけられハ鈴虫  
らいたん掌か合せく阿弥陀仏くところハ松虫も西ふむ母うまは  
蓮小導玉へと念一石と拾く袂ハ兄弟抱合く谷川の流さふ兄探ん  
らう折しも背後の木陰よりやう兩人とやまるへうずさむく色々の  
一人の沙門走り出くかゝるめけしハ兄弟ハひわゆること驚きあがら  
覚悟まらめく死する者どほく死させむりれじといハ沙門いく父を失ん  
と名ひつめたるわどるんばさめくやういといこれのんその仔細くまぞ  
語るべしといハ松虫をさづめ死すのぞく御出家ハ幸ありやうま  
ふまうく何れつゝいへ死す細と語りてさめくおねがうハ引寄て来世に  
たすけむりれし妻ハ松虫とせこれるハ妹ハ鈴虫とやあり父ハ下野の國の  
住人ハ須田弥兵衛とせく木曾の門ハ一者ありやう壽永のころハ  
木曾殿亡玉ひく御一門ちうとまりむハ父も此山中ハかくとく樵夫とあり  
妻兄弟なまうけつゝ三年とたふ父まうりぬ母ハ小萩とアせしが前の月雪中  
小死これあるその遺骨かくゆと語り蝦蟇丸がこと野分の方の邦見する  
と母の屍の七日くふらうとたうと世の無常ハ悟り死んといひはめく志  
まむ細小やうと哭けりかの沙門とい哀小とひく黒深の袖とせやう  
やありく我ハ法然上人の徒弟ハ常照坊といふ者あり今朝上人我を  
召むひく命ける昨夜の夢ハ佛のめく愛宕の山奥ハ兄弟あり孝ハ  
流死切女あり今ハ宿世の悪報消滅く喜提の乃ハ入るべし時  
くやうのさく教化ハ徒弟とるまとい告玉ひぬめ小我彼所ハ  
尋ハやかりへま二年配所より飯洛く後三月讃岐ハ左遷同年上月飯洛  
行歩もあまざれば我小うりく彼怨つり尋よ仏の告ハなふべう

兄弟の幼女母の死の  
 九相の変とると観く  
 無常の世と悟り  
 溪水自身と投と  
 常照阿闍梨  
 して法然上人の  
 徒弟と  
 一人比丘尼と  
 あり是なり



蕭疎蔓  
 草遠纏  
 骨散彼  
 捨斯未難  
 得瓜髪分  
 離盈野外  
 頭顱腐敗在  
 巖端西陵雨  
 夕年々朽東  
 岱風時處々殘  
 忽作龍門原上  
 土枯榮不識昔  
 誰棺



若むふのこれ  
 さらけと  
 口もやめ  
 いふ一人

と命めいとあふふふふりり 今日けふ此こゝ山やま中なかにに尋たづねねしし小こ果くわししくく沙さ等たうふふののひひぬぬ切きししとといいふふも  
 我われ説せつををききけけ夫つま人ひとのの高たか其その屋やのの階かゝももへへととらられれてて梵ぼん衆しゆ梵ぼん補ぼのの雲うんをを望のぞみみ  
 ろくろく帝てい釈しやく柔じゆう軟なんのの床とこもも下くだりりれれくく三さん十じゆう三さん天てんのの花はなををりりののそそふふとといいふふ  
 六む天てん魔ま王わうのの位ゐ四し種しゆ輪りん王わうのの跡あと望のぞみみ絶たぎくくののめめががななくくととどど生せい死し有いう漏ろうのの果くわ報ほう  
 生せい滅めつのの拙せつとといいふふももああららずず五ご障しやうのの雲うんくく時ときああららずず愚ぐ  
 痴ちのの海うみ深ふかくく三さん徒たのの波なみににああららずず六む趣しゆ四し生せいふふめめとといいふふけけくく  
 小こ死しんんとと罪つみ深ふかくく業ごうああららずず三さん途た八はち難なんふふ赴しゆきき六む趣しゆ四し生せいふふめめとといいふふけけくく  
 母ははののああららずずもも深ふかくく苦くああららずず上かみ人ひとのの徒た弟ていとといいふふ剃は髮げ深ふか衣え小こ婆は瓜うりとといいふふ  
 専せん修しゆ專せん念ねんのの行ぎやう者しやとといいふふ龍りゆう女にょがが速すみ成せいとといいふふ如に説せつのの往かう生せい瓜うりとといいふふ  
 ああららずず母ははのの菩ぼ提だいとといいふふかかはは蓮れんとといいふふやや檀だん林りん皇かう后こうのの九く相しやうとといいふふ觀くわん念ねんとといいふふ  
 素そ懐くわいとといいふふ法ほふ如に禪ぜん尼に神じん將しやうのの繼けい母ぼのの曾そうとといいふふ正せい見けんとといいふふ及及びししてて列れつとといいふふ

